續孫子兵法 二編 下

へ遠13
1164
27

宮嶋氏蔵書

海野信盛蔵書

續膝栗毛二編 壬巻

阿伏兎を発船し。撰津の湊戸をこゆる。

絵の島沖の海乃あらにいろ〳〵に西国方の

人衣の出私ありとゝ。紫の幕打まゝへ。多

陰馬下るゞ袖のうらまゝ〳〵てゝるゞ紅白

の流し船よりまるびひ。於よひるがくてゝ賞

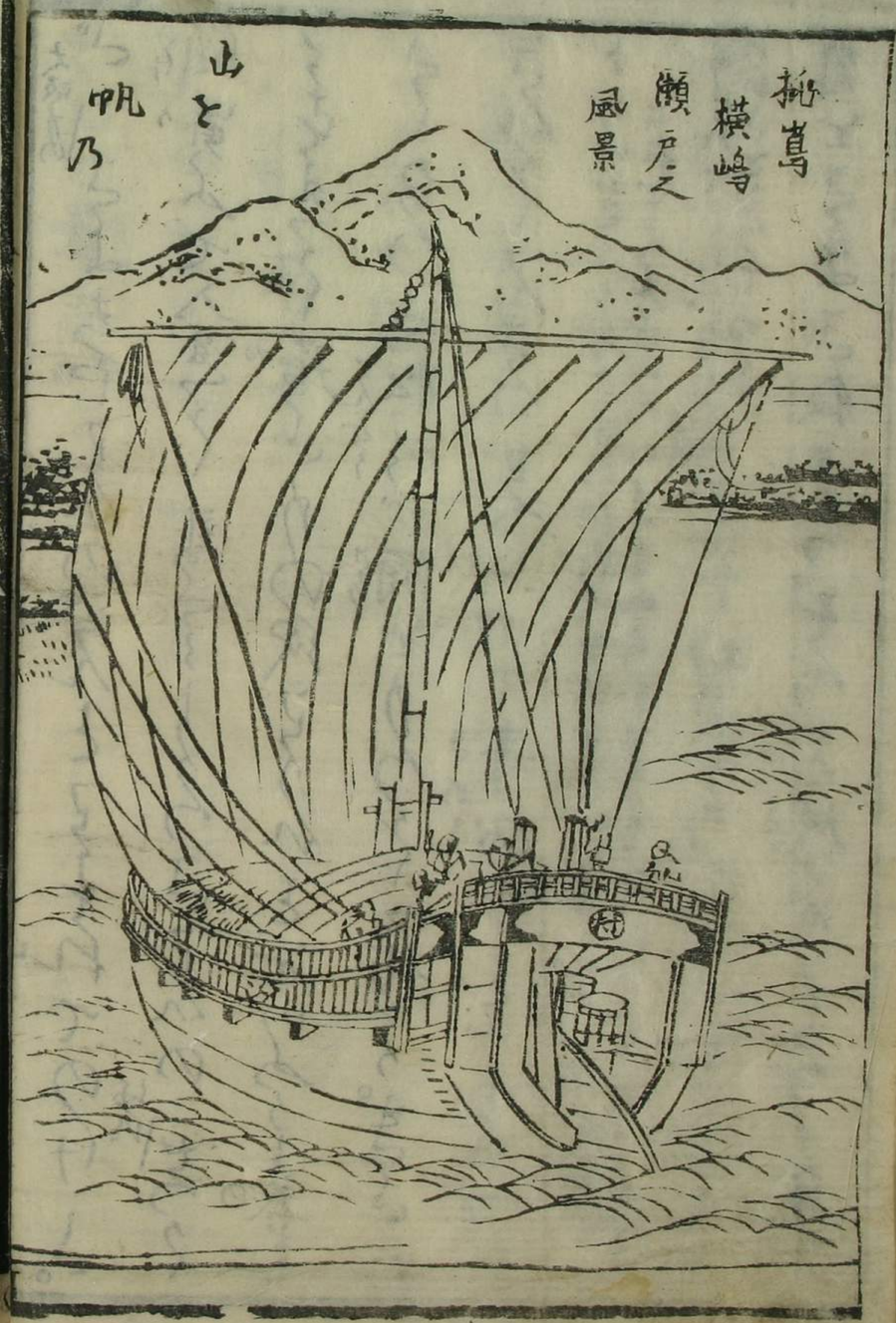
いとすまげよ人えとろぷ。ぱあん私を小私あまゝ

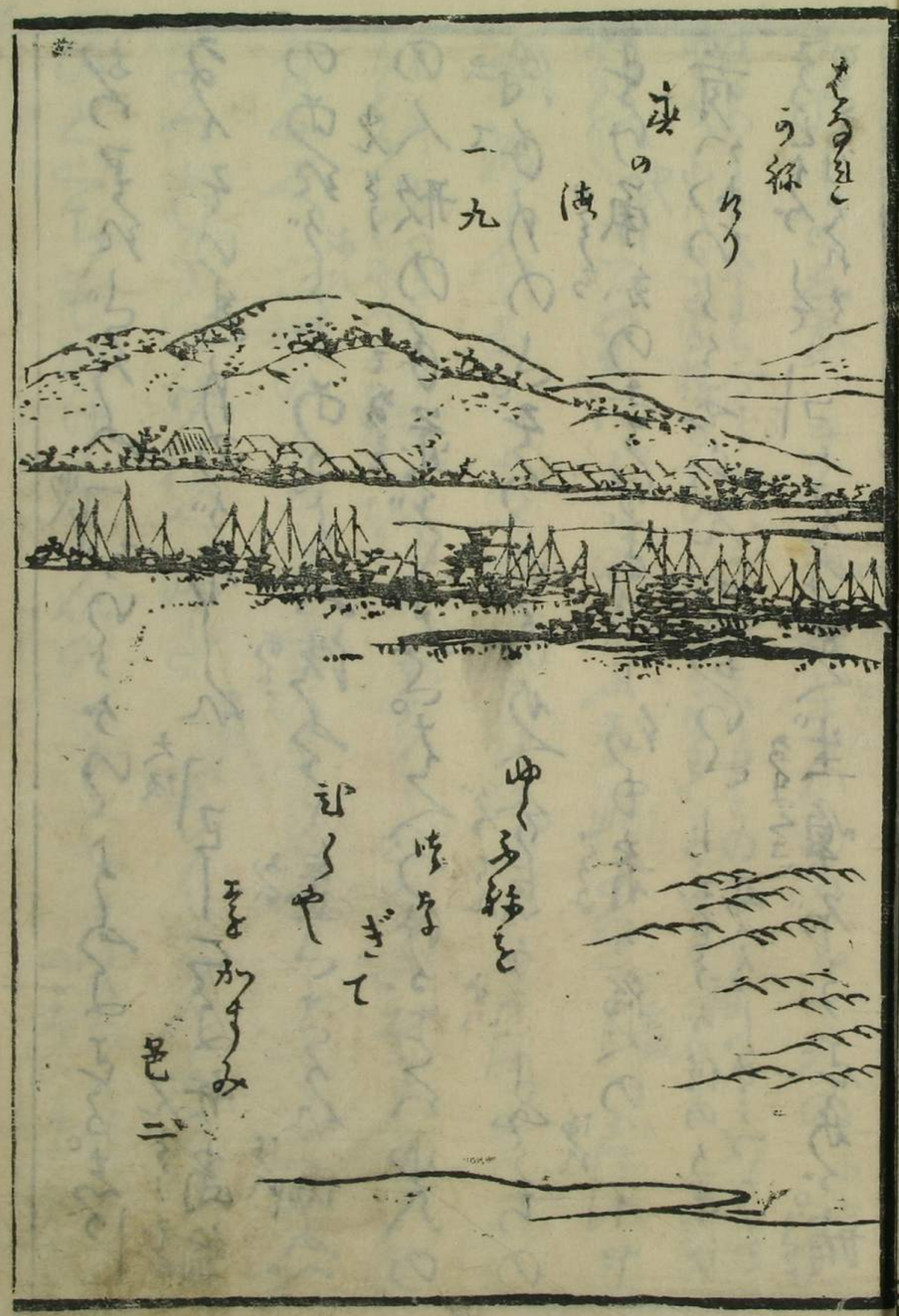
二ゆよるびゝ。藤掛子をそろくてひきとろ給。

特 13 1164 27

めづらしく。板子を踏みゝを音ブクタン〳〵のやうにさいさいうちあつ。めでたのく。エイソリヤ。若枝もエイ〳〵エイ〳〵枝もさろく。茂もさろく。繁る代のたのしみ。ちとせよ。亀ハ万年や。エイソリヤお松ハ洗濯水呉服屋や。ヤヨエイヤたゝく。玉の光ノヨウコン唐本ばくろノホンホンホンホウ。ろんいろく。エイコノ〳〵グワンダク〳〵ナレトさるゆゝるりんぢやア。新くろ。そのさぞ。そりのぢぞを着よかろいろ。あぐ。ぢのゆゝかしくるめ

大阪方のぢ。さよまぢやろんのぞんとこゝとれてのけと。酒屋ふて入まつく。まつこゝろろさろんの。ぜろくろこさまつく。居さりの紙ぞろんをいろ〳〵呑こさくるつさ。私ぢが酒をりつく。居るろぞさハさんく〳〵さろ。せへ。イヤ。奇ぬるとぢあろ。せへトかのおせうぶぢさんの酒行くゆびをさを。ぬ。のり。金ゝゝゝ。これをゝをまびいろのまよるゆらおせうも。他の男もぬるだこゝ。りられてこゝろひるく。後。コリヤ。もりろい。アノ。もゝやうぶ。りびきをかりそのろ。目をさまさねうち。そろと。杉紙。こぞ〜るどへ


摂津
横嶋
瀬戸之
風景
山と
帆乃


安の浦
一九
邑二

[illegible]

のあ[illegible]と三本　まず[illegible]持参ありがてえのト中ほど大きさ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

並酒じゃあろう。おとっつあんモウよろこんト立合

[illegible]

[illegible]

[illegible]

さて。ぞうにけ移へ酒ぐ[illegible]ドレ。ぞんよりもえ。

ひとこちもいけんぞんのペッペッ。ト[illegible]ひ[illegible]

のまぐいすのす

あてでとをりひるがごちさえつあるくつちやこんぼのぐりーの三武
うちふのへ言井百姓のあるうをうちとぞ尾のるあぞうきさうろう。
鞆より汐干五里余 汐干北東へ山あるく。ぞうのうへ入海乃
深うあり。鞆よりへ行まころて繁昌の地なん
べ。ようづの南家残るかるく。殊よ築出の
形地あり。接女町あるどありて。中出きの漁
うりとぞ。

日の新へ青い海原をてらしつ
光る孔雀の尾の道の沖

これより徐福をうちるぞ。南の方山伏の瀬戸
免えりの瀬戸。曇ぐる瀬戸なんどいへとんつく。
瀬見福。鞆地福をとぞさく。瀬戸四といへあるう
ふいうりし所 目をさまし「コリヤ久三子ヤ。目をあけん
うい。ものどこりとくづりあつさぞやあろ「エイ
ゆちふどもいへとこそう。だでいてよのえへませぬ
「とい「一盛やろうい。こりやそのとぞどもこへぎう
せあい「エイこれう子ヤトかのこふづとをりいどもべ。「コレ久三子ヤ。

ヨどゞまるよハぴぞうひんども喰やせんうい（堺）（久三）エイ。うら
いろふてもんませねろん（おせん）おどん（頂）かうい（おるこヤ）。
三年の見ども二年あるこん。ちうもノヨふといあぶ
るのんういぴおどれこうひおろうさおやあろト（他の男と大きまあるをうく）。
こうのさあん初のうちおりしく。今よりさ酒樽をうんく。（コリヤその酒
おるでおろうふと目ひき袖ひきしてあるとおせう（思）
どもこうくばうせ。時よ（の）ろ合のおれ。酒ひとつどまい。
ゐトいろよこうのくぜんこうくの（悪酒よりこうこうこうれば
ぶちこうこうわう）（ハイ）有がうよどうやとぶ。
一向ヨ酒法でござりやとぶ（おせう）そうちやの祝きのお

かうへ（小八）イヤうらもト（ゲに）戸で（ひとつぐ）一杯もトさうやとぶね
（大阪）いひあへせうのよきみ不得（ふえて）でござりまはうい
ゐ（おまえ）ツリヤいるるぞさけといふりのへ。（おまて）おぶるふて
いいんりのどやぞうきれかうきれおよとぶるん。
コリヤ久三（久三）法のござりれ（エイく）（おせう）コリく（おせう）その指どや
ゐんぞりヤ麦千が折（ちうく）角ふりつぶ。あとのよ道（さつう）で
りきゐんぞんな（なお）転どもで。その酒（さけのま）呑ちうさ。（づつう）腫
ごーてさまるりめどやうん。包（つつま）の中の丼（さ系）筒

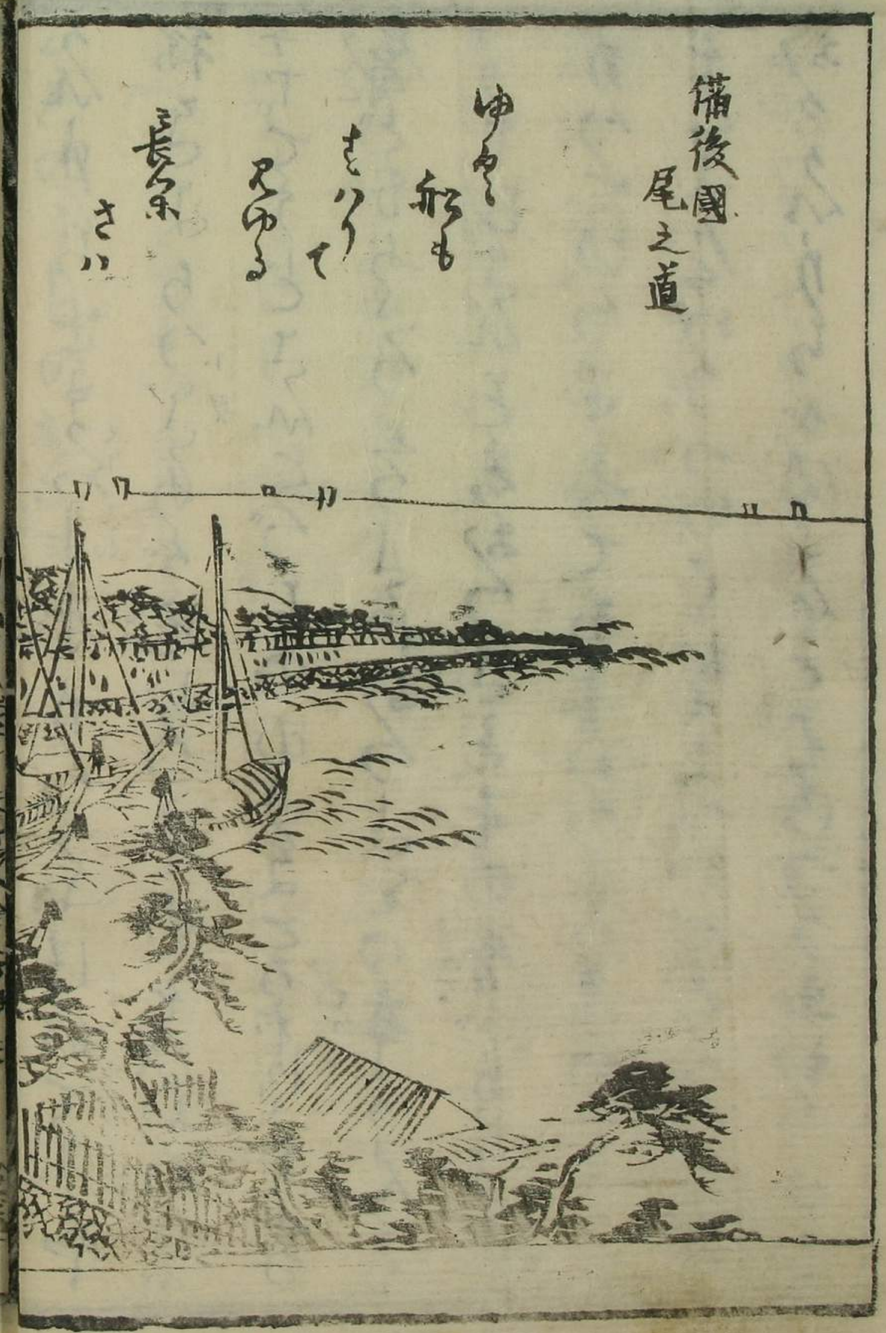
どもばっせん。トさっぱりあけさせたいぐらいぐらいぐらいぐ
「ヤく」
接別あい酒ぢや。うまいく。そおかうぐらいぐ
下戸で残念ない。トちょっちょっちょうまいのむをんでぐらぐら
さるとちゃく。はたらく少しかのどをぐびぐびぐび

ざぞぷのんでもとうくとうとぬんぷまくまいらも
ひとついうぶれゆせうぷ。コリヤうそぷんへ
元の弟のそておそや久仁ニヤうぷそのえ
りちむさんけよぷふひませぬ 後ナニこれが
むさんこぶあるものぶ 後むさんともくぷぷん
せうぶやうん。阿伏鬼の目ぶ金ぶくよそる
平へいさぷんりちこーろのくぶやあつぶ。
そそのうちのおどまんようが。釜の中乃

うんりちをまりまりくはいてぶや
稲さよぷちつさあぶ遠おろくあそびおろぶ
手ヤ。てうどさんこぶづちのあるまとろぶはこうふる
屠ぶもふろうろうよれおろさを。伊達ぐんく。
コリヤむさんをあおろとそのぶもぜんぶ
りつそひろさくて。ろーおろえるのぶまぶ
そそよ。ぶぶづつのいくおる上へおどまんのついて
おるうんりちがぷりよんとそのづ出おろさを

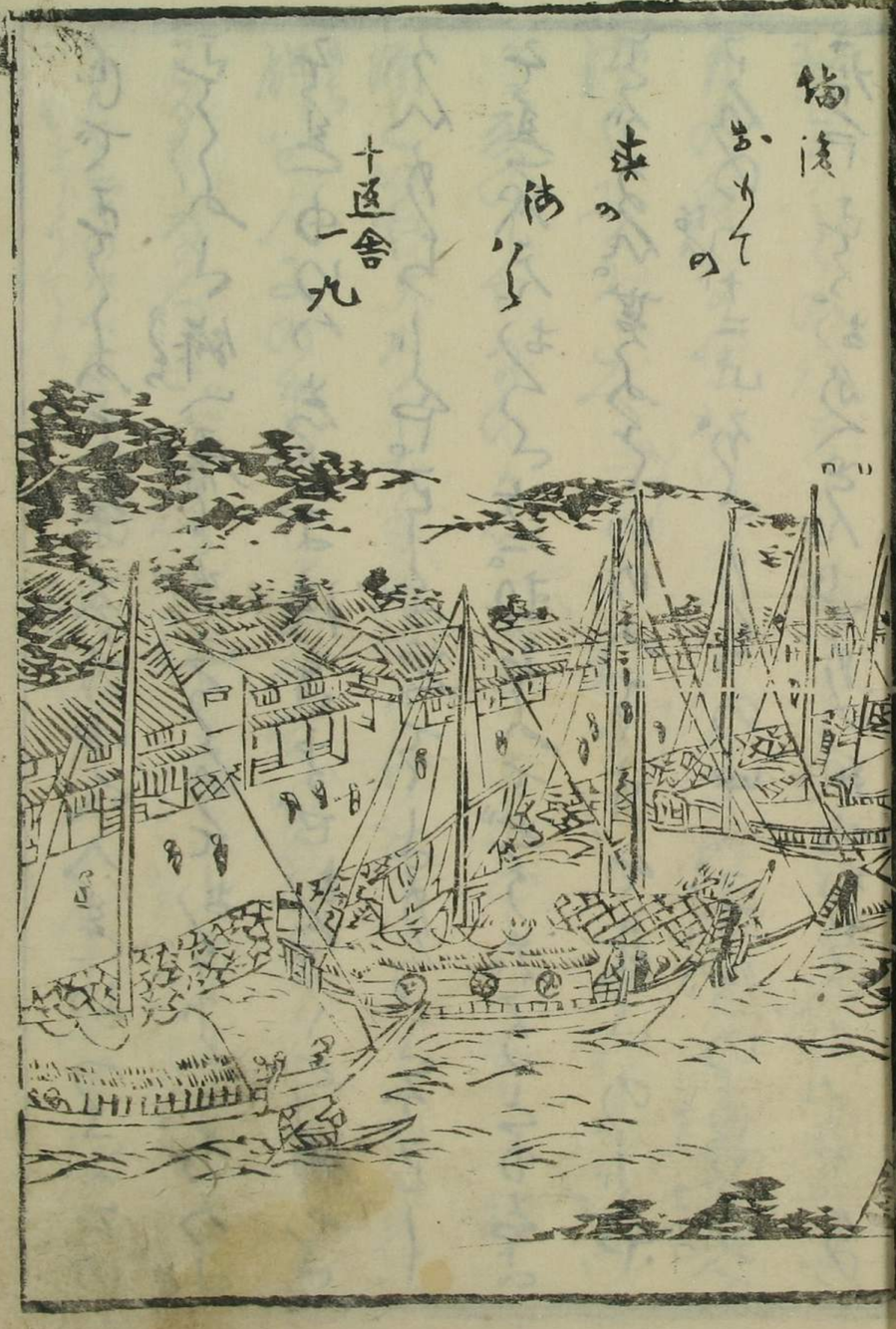
備後國
尾之道

ゆゑも
舟も
きりて
見ゆる
長浜
さハ



備後
おりての
楽の
海べ

十返舍一九



めでたくこの中へ入れおくべし
さてこの餅は屠蘇もとらんとおくべしあるよ。
そなたもいつまでよはきまぜおくべしとうるさ
くんりらじゃ。そなたこそとりつくべし
そなたは紙入れもとケニ。むそんいどうだろうとも
そなたのくん。黄のくいのんてりやてあるこのじゃ
くんの陪十二はぶくさのうちの中へ子供の重ぶ変て
屠や。そなたもめくとくんぶきの紙らんせ。イロ
おせうどのの。さてさ稲へとろそ。うぬぶこうねく
りの紙ぶのぜおいくよこうせさのぶそうも稲へ
ぶくふうぶえ。おまいぶそれまくん
ケニ。ろいのじゃろいくん。ナニコとんぶごとーやァ稲へ。
酒こいやァろくでも稲へさけをイヤろーでもねく
餅ど。人よのませやァぶそぷめくまんぷ。稲が
ろくろのつ。ゲエリゲロくト面白のえぶさりちのあくんと
いぶそとぞのゆくたろ。おりわぶけんまつさえき
ゆもまくりてたくヨリ十何ちのさんーぞ。むそくん

ととやコレおまん下戸じゃやといふてぢぷひどう酒
をいたゞくどじゃそこでこうひるぞうびんのあ
どもたちがづらんしゝぱパアきこへおつこゞつ
ぶさんぢどもひどうびんとてこうんしゝるイヤ
ぶさうこまめナニこのこの婚をとうとこうのこ
ぶ作イヤくこふさまちんいないだうをいのみゴリト
ものべ靴のやんだうやでこうさのこ
ぶくこうあるどうだうしさこう。むこかう靴でこ。

昭和さまのさこふまあるてどうびんこうんケこ。
うもせんこんナニノまんだうやでこうこそまる
りのこんその酒をいたゞどもそれでまれさこへ
ぶこへぶきゆんエイコレこんぶ。ぶ搗めひどう狂ふうさ
酒もどうびんもどどやこよがねこをおつて打こうこ
このじゃさこをおくせちちこのてこんトこのおこう
きげんこそだんどこのつこひぶこどうれバやこここう
こちかこうこ酒のもとこんこうこれとうバゆうこう平此
けづうまこうめおこうげつまこの男をどうまこうこと

天拜拳

ありやアげる。あそこへ　ちぐぞうとつ法よアぞたろうこべ
ことぞと　おろぐーしろそつをかくらんとそ。ぞこ八ぞ乃ごよ
たぐぞ。ぞうさ　ぞうちうりちをうくひやうーよ法をくも
降く　一ゲロりく　大阪　コりヤやくーとものや　ゆりくとごやよ
も。そぐいよぞうびんの乃ごぞたちをうりく。
コりヤとちきんとんトりひさまよおおせうもへごよとぐうり
へとごうけよ　ゆりてさうぐをのう合の人ぐあうちうちをうぐ
ぐうくくよ　ちぐゆうくはうちあへ忠のうををぞぐ二股とりふ小倉イ
く屋の乃ごうり　七里余

鯖のあくひくー　嗔恨の根もあくて

いぐあひりちの私の業合
ちれうう　坤の風もとう。汝もうくかうう移べ。
宗浦とうよ舵をうけて。その夜ハこよこまうる。
翌日北岩のあくを追風のうとて発出ぐ。かまうの
陳戸を打る。平相国清盛のいうく為のおん神を
あぐきんと祈誓あくしよ。明神大蛇のかうちを現ぐ
ありひけ見べ。お岡あくそれのひて東の方へ漕戻ごうせ
ありよ。お方向ひ汐あて。私のぐりがさうくーぐ

相生いろのひて。海上をあませまひしらべ、夕
逆さるる上のうえひきてとうりさるふうて一石を。
清盛のあくまの瀬戸といふなりとぞ。
清盛のあくまの瀬戸、日ふハ又
あき出し笑ふ山の追風
芸より鉸岩市日市紙ぞ。ゐどるく藝州
宮島あぞ見るる。患の海より二十里余七里
女神あてとせまふ宮島の

神ハとさら祭ごゑ一ト
仕ゐりうるるく陸よのぼりそれよ扶桑
して。おりひくよりれ出くまぞ。陸ふ小ハ
そそうろうくとこんのるるうやぐてある
旅籠屋ようて浦モ明あんるの出ぞ
今ノ夜。ろうちとあくあのミやを「エイ
あとまうでぐんもろ。ちふうぐやる。ちふ
どうちゃでぐんを「ろうちゃ。武州五ごで

ござりやせ　男「サアおあがりなされ」おちゑん
どのおりて二階どものふ向めへおこづかせて
いんせ　女「よふお出なされまし」こちらやへ
おあがりなされませ　男「ハヽ　なるほど宮様ハ
女のいひなりごとさんしようがまんざらで行へおろ
りのぶの　女「ほんにさりやのぶ行へうちうち。
女のことをいふうるせへ男ど「ハヽ　おいらとたゝるまよ
せておいてさらばけりをおろふでこそふうまくふ

さる程へでいくゝ清左衛門コヽハよふお須でおるとぞ
お宮へハ糸瀧でおいんせんなる　男「イヤとてもよ
こへめくりやせこさあはくなるべ今夜うち
どもかこのお客さまへまゝお燈明をお上なされ
まんケこまあハ指どもつるハさんすてゆさう
やりとハ糸瀧なるなれまセトいひとそこかうとなる。
なるほどあとゝゝ中日中　清左衛門「うらあとづりやまんケこ　お宮
れなれが女さうとく
へおそいうなのを　清左衛門「アイいとこやせこうゝモシ

嘆る月
行年を
うかゝ絵て
えゝ
生るハ
あるゝの
ちゝ
おもゝ
さゝ
ゝ
茶邑堂

[illegible]を卦朱が買てこんろの世へそして茶屋を
一ッそくしのこゝゆとて女「アヒイ〳〵。うらるゝでゝうゝ
ごんこゝうゝト雨傘一斤うりて[illegible]ヒトヘヅウリ
をゝりて陰「コリヤ銭ハ是だゝうゝ「さあはそくぐ
おんを陰「うんのこゝ[illegible]ぷゝうら祝ゝ叫紙れか
女「毒魚と三魚のれゝ[illegible]ゝヤケこそれで卦朱分て
ごんを陰「ゝア銀れゝ。ようあゝ[illegible]ザ少人生ゝけ
ゝゝゝ陰「コリヤ女中お[illegible]あくうまそゝうそこまる

女のいろきるよ　おもるのまいすせ　ト女のあんるのうちつれく
とちいでぬちとぐれの松だいをとぐて焼肉をいろうんるる。
社況の花鬘いんだろうるく。心本社の内陣旦廊く百八焼づろ
みあるをとぐげ東西の松の木のろだく、石焼等もびとぬしく
とりつれしるけしきぎとよ舞とりみへ。此九焼の科ぐて。
銀玉金あるこれいを青獣焼の施主あるて。
とりそろくしるるり。先ひろまよりて。

琵琶ひきせのうの由ろうや法人よ
だだち利生ある神ぞるさ
とよ弥山の宮巡りとのるあまじも。夜中
のとろのれば。先ひ焼肉の末社のまあくまよ

巡浄してのるるとぐだら。松だるよさしかろ。
ひるるりどだるみよきんさろうん。お定も
信猪ぶぶ。又此婦さまも待猪ぶ。コレあんを
此男が念げくのるかろ。油沙まるさ系のん
ト　アニのよろくよ亟紅しく長るのん。サア
をひるぶ。ろちくんるのせん　ト此の女のをさるる
ホろく。おろうんエしてやとぶくれつひる
ホトはをつきとぶとぶ。森のあーよ
つまげが森おどろきとろことちのぐるよ浄ろ

男　ヤアくるんざくト　きりぬつぶせば、麻いとの
もどろきてとびいぶることこそは
もうろうとして　女　フホ〳〵ひどうしてよどんそどもアリヤ
変の麻でおんと　男　ナニ麻がこちらよりやとこ
女　ヨウ神さまの一つくしめじやナニ　男　ゆんがのめん
るのげよ居ちりまた　男　ハアそれで驚つひと。
そんとんまふどよ。ぼてこの男ハもうせうよ先へ
逃出しこんさいとおナニトもめくぺ〳〵青ちのふが
まがのるがきうそくこと神くう　女　ゆんじやへ

男　ゆんざとんまれさこうこ。岩ハいそぬ。あこうよ
人のなー。ちくうとまし海麻ちんう。そのうこり
右くら左攘が脾ぶ、ぶ紙もめくよしあこ乃
ちくーざト　せんこくの限れを紙よつこ女のおとこ
はぢごんでおきつこと女こもを使ぶ　男　うら
そんゆけあこやとこと。もどれんさあがこのいく
ケニ。ちこみーゆのあれト　女房　コヽトイフ
四五間だこうあこちみーこうしが限れをうちつけられ
ちとしてあるこうこれがおちへ引こ
ちこーこうきこへハか女こうれがこうしこがみのくこちこ
更ぶぶーやとこちあぶこのこをんく　ヤ

ほうさんるのあ紙ごぶ祝る「ころさの銀れを
おとてこ「女アレくあまてどやさづんせんう「陽ドレくどさま
ト ふうこうこれば又蕨ぶ祝あるて「ほたアノくぷちくせさあ
銀れとむさ夢くくとくそある
三義を猪よふくせやアがろさぷめ（まいやつぶ
ト 石をひろいてやさく蕨ようちつけると「ロイ蕨よ陽ごろ
而のりのども四丸人とをりあいと
うちあるへぷそめつどやぷどまま「つけるぞ
きろ猪ぷとらいる「ニこつうふへぷちまぶ石紙ぶろかどふ
そやうも祝へぶのめ「ほる神さ夏のも舞どやぷ

さんふこやつへ。舎而ものとどろて。ぶろ頃親
どとうよとるうせけつう「ト ほうトとるどるまる
これとおうそくども多せいよぶどいうるのかどつこふへと女ようくいと
ぶのりのどもよあいさうーてぶへとくさもどるるはけーころの
おさそふて蕨へぶ祝のうろーめるうとて人これうるまかぶりり
蕨をあやーれーりのへ猪よくそやーの三魚といひつるる魚ぶりの
じるかくへのくーく
いひーるとうえさく

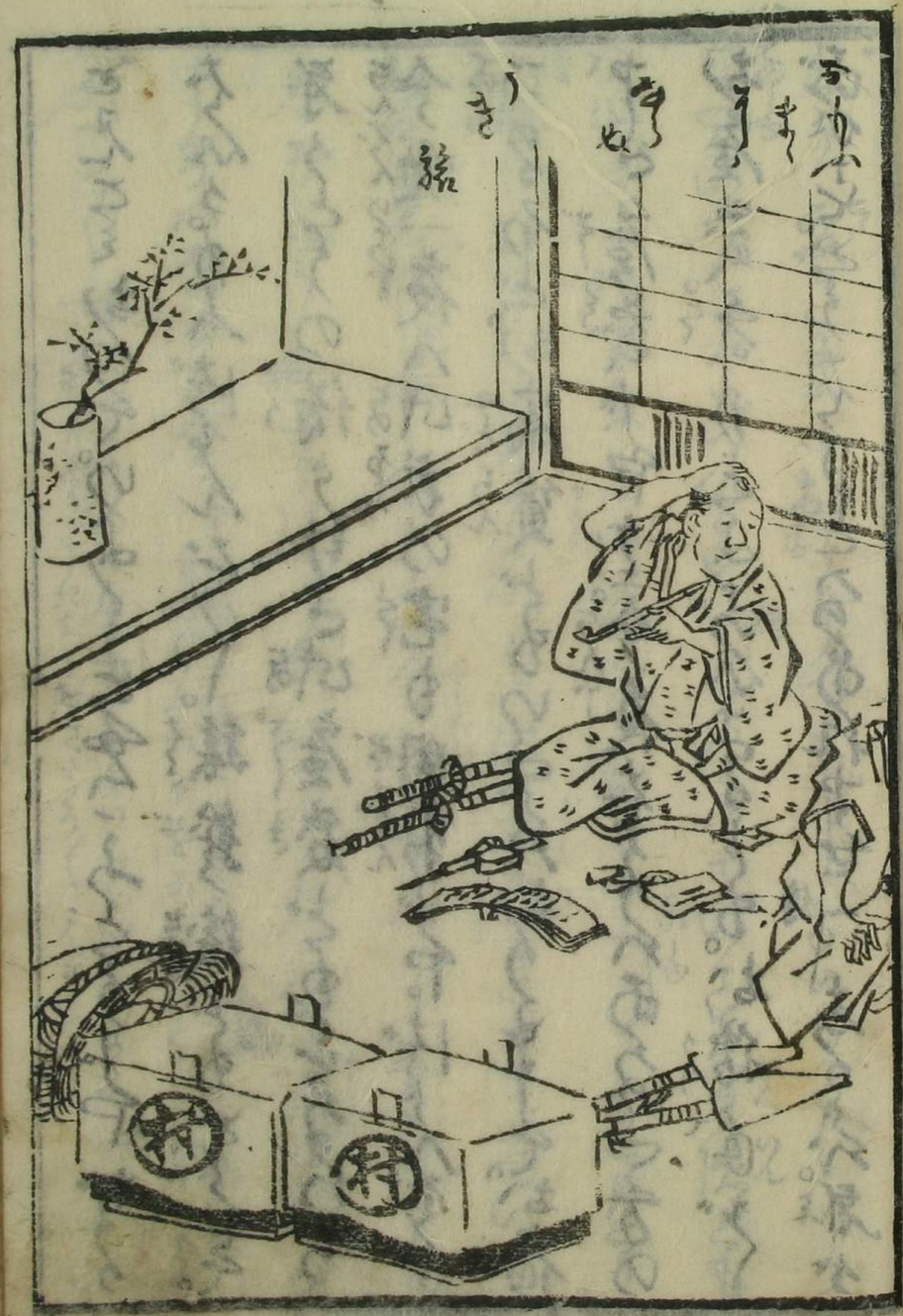
源りく蕨つうそどもちるることそ
痛へしる之 女 ふぶ
かくてそのまく猪筋ぶ祝くーしるよ喜ーこも

出ないひて「是ハもぢ」おくりするあれ。サア
お湯が沸ましたケニ。お入なあれ 隣 アイ。そんざ
雑よおうて。ゆきが見てよるうち。もうさ行へ
きらるべんぞ。トそぐよりどのくこそる。きこハハりとめニそい
ざーをつこ。ふぞるど。中 「アイ。これハ。ゆての移くな。トしいひい
そくこりつてくる
らひておくハこるる紙よつこがくてまりあと。ぞてほたと陽よりあぐ
ぬ。小ハうつて入よおくこるるりざーこる西出ざこる侍気とこん。
ぬ。ーおハせこるが。そのくメこるハ定宿あてほたと出ハりハあそ
ぬ。ーこーこどもこるうのーぶ人こるよ陽へこるこらこぞうぶうく
ニこくいひこるがおうて。「ーリ下くこるぶ業へ。何と紹ても。

テヤ。身ども間屋衆どものお入でハりうぞい
ぬ。旅人ども相宿をせるこもの。ひ方家風ぐく
うのうのひとどやが。我業白家業のうのおぢ。
そんぐんぐけハのるんぐ。外の旅人ども。
身方等こりさ外。風呂さすく入まもつこ。
いぐこるまうひぞく。「エイ是ハうら。今潔法で
ぐんこぢめんるあ。これたうんさあ見すを。「イニヤ
まうるのうるん。身ぐとう今日ハうん。あうう

さるきさぶろさゑもんどの湯どもたくみやせとア
つけさそれよるのごろんこんがつよりのしやゝ茶
はた方出入ごもおぢちあげるぞ一エイ〳〵さあつく
ぶも作らまきてへらつ遠慮どもいて
ありまんぞおつらやのもあるじもさらくへまほ
しへ茶掛ドやケこいつをそその湯どもりゝ
ぶつて汲習おくしうたゝもやたゝおもふ
されてはうへさアれませ一イニヤ身ひとう。呂今

ようう。外宿へまろうづんだいどんがる宿
茶よいろかんぞ一ようんのげよさあはくうん
つゝとぴろくもとびとヤてもの湯ひがのへ三。
ちよとぶおんせん。ぽ猪ごとりとなる
おぶざあまとませトさうたゝやきれよやそのけられ
やゝとち茶のこい侍一ようだんく。ひがようへ年来岐
きれどそもいつれぞ今青もるちぶ茶を出てそりう
方の定宿いゝ一ありるのぐら。身そをらをうけ
ぶゝとる。今日遠足ども一。だりぐそい不



をんこゝ　おつてゝよく　こゝ　ふこゝろ　ゞや　なう
だんろのゝ　ばゝ　ぐん　ぞく。　旅籠　錢　殘　ども　ぞこ　ぜこ。
身　ぐ　こゝろの　侍　うけ　こゝ　山　屋敷　ども。　こゝろの　ろ
今晩　一夜　八山　方の　宅　も　同　業　ゞ　や。　ばゝ　ん　ぞ　く
侍　ろ　ゝ　ど。　お　宿賃　ど　も　い　こ　ぞ　れ　ま　り　ま　せ　ん　で。　お　宿
や　こ　屋敷　ゞ　や　ケ　ニ。　今　夜　だ　ろ　う　へ　あ　ろ　こ　こ　方　の
お　屋敷　表　ゞ　り　こ　よ　ぞ　ん　こ　ま　る　も。　お　侍　ま　ぐ
ぞ　ん　こ　ど。　ど　う　だ　ろ　こ　と　ろ　の　あ　れ　ま　せ　侍　ま　ろ　ぶ。　身　ぐ

こゝろ　表　こゝ　ま　よ　お　居　し　て　も。　や　か　ろ　の　ろ　だ　ん　ろ
侍　こ　ま　あ　つ　く　で　ぞ　ん　こ　ま　こ　侍　こ　ろ　こ　ま　こ　こ　こ　ま　こ。　表　侍　ど　も
八　山　ぞ　ん　こ　ま　こ　ま　よ　ま　ん　こ　ま　こ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　侍
あ　り　お　る　こ　ま　ろ　ま　ぞ　ん　く。　山　屋敷　こ　ま　よ　ま　ま　こ　こ
お　る　表　侍　ど　や　ま　ど　よ。　今　晩　中　ハ　ア　ノ　表　侍　も。
身　ぐ　こ　ま　の　表　侍　ど　や。　只　今　た　れ　よ　殘　こ　こ　ぞ　ぐ
中　ま　ハ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

はなのかのだいるのうだん。こりやくていをぞうん
いよいよ身をあらためるをあつかひあるる。風呂さまへ。
外の旅人どもをさるくへ入をあるる。きさ雪屋どり。
うでうん。身をうり余人をさるくありあるるテヤ
「エイそれいうらそんでおりませぬ」「待」きちんごん
とをまるるんぞ。アノ雪屋ども。呂今ごぶんで。建
るをせ「エイ〳〵」こそばゆ。とをとをとん。どうだりと殺さ
ケニ。ってるをとをとへ今いうきあんでけぬくひで

ぶんを「待」いろさるを建東をかるうよ。身をうを
うの紙〳〵でせうんだん。トけうちせうちんうり出てくる
りのかきさハうぢぶとうとうて
「待」あるつ何りのじやテヤ。身がどうの雪屋どもへ
挨拶もせるんで。法他法千万。没義どもども
るるだんう。身ども不如帰どもあるりあるが呂今
るるるるよるるつて来るつ。そのやうせうちんへうみごと
りちまりさくるとをとをとハきげんるわりきうドをあのてま
むざるどいひてうらんこをさるよ。ぬうぬ。ハふをてまひとへごて
けいさをあるく。皮ぬるうち。「待」
ちんるめとんをりちきうり。「待」おうるあれやせ

（ハ）ヲイ〳〵あのさんざろうきさろうちがらうさこと
（ちちち）知ざろうの（女）ヲホ〳〵。ざうだうもせう ケニ。まあ
おそうるのあま ト とをとうあてがん おうされさせておん
（ぞぞ）ぞこハハせんこくかこ（ちきる）りちくろ（ちち）ぶ（ちち）ぶとおとこてぶう
（出）ぶとんのうちふそむまあり〳〵とうらふ
何をとうく（ハ）るんでも祝人 （侍）むこやくちぶ
（ま）るハぶれふもちうとられろく （ハ）ちりがぶ。
ひとうやうふうソしるげるぞト さんちうひとうう
（ち）べてはとうハ猿と 赤ちびとしく。赤ハ犬のごく町ゆ
（ま）ハ猿ハ家〳〵の屋根ばよあうりゆでこうハがらしまは

ひものあるとかんぞうびうていたれをうりてくども。赤猿
ともよ神使ゆうとてぶのりのこれようまハざればうこうよ人せ
（ぞ）ぞれぞこうひもはやどの窓（ま）ろ猿（ぞ）とびこてぶざ（ぞ）ぶのうふ（ぶ）ぶう
（ま）ぶざれおうくりのをうぶさうりてゆうこうちぎくさそちが
（ま）ばしるゆんぢうをけぞ（ぞ）くうろてうふ（ぶ）ろふ猿利にうそ（ま）の
（ま）んあきりのるればそのるげ（出）るおとかんぞうぞうちうろそ
（ぞ）ぞうふとぶうろうこうまうぶ。（侍）コリりくどうくるげうろ。
（ぞ）ぞうあうとうぞうりおうてそ
さうぞうまれ祝人 （ハ）うそうくひとうろうぶまで
いよるる（侍）イヤまぞ。ゆんぞうるうねんりよ一ッ
（ハ）れうく（ハ）そんるうようるのげるぞト 又ひとうるげて
（侍）ひうひて ゆうと猿ぞうこう
（ハ）ゆうぞうまれ祝人。ゆめくぞうう

のげーとぞ「ハイ」いやくそのまハころ猫へぴゆ猿
ふあちよへ「はい」エくだゆんくろハせな。どこへうのげ ちろこ
ゆーとトあさるをろ。そころさるとぶ。かの猿の毛よ
さろうびろこそくそをひろこませバ。猿ゆこそくあげて
ゆく「はい」ろんざ猫ざそへ。シュシュく トはうちたやゆハこを
猫ろうくろゆうとこ。
ぶたゆもゆとんりうぶうざやりくと猫ゆるうち。のとゆう人のすう。
あーおとのようのよみーうーくとたをものなるおとを。ぶハきて耳をまーそ。
さてこそゆくそくせー。かの下女のちのびあるろふんとずちゆころよ。
女ゆハあふでせんこくの猿。ぶハのゆとろよりちざろーのあるこぜうち
せーあや。そろうくとそひこうぶ。ぶハのろりりこうらぶとんのせへ
ゆをさーこもゆこと。ぶハこそろえりこまんとそのゆどこくきゆうてんし。
ろうとりへてたゆうくせバ。猿ゆきゆちとさけびてぶゆうのうりよ
りちりつく。ぶゆくあどろさこれゆまうざろこのふてたちゆあきるひゆし

よ。猿をとろつてゆうり出さとと。猿ゆうろーこ人がきくくとみたちまをつひ。
かゆゆのの上へうりあげり。らんゆうこ。ゆうりのざーきこ人そうんざりーしん。
そこよりーあうーしあたの。ぶひんさ死人そびつけバこれゆまろつとざうり
あどろこそ。おきあげるとここまくー祝ゆくよあどろこ。行ぶゆやふんとおきーこ。
そのさろこぶこ。猿ゆろーこ人。出たをうーこのひあろちころこ人。そびあるく。
こぶげりーうこぶれりかれてこけるゆくぶちきるゆ。屋ざそのかくうこゆまこげれて
ようこよーこをこれざうどうこそろうちきこ人の家。ぶそう火ゆうちつけ。くろふ
ちろつけゆよ火ととりーこんれバ。犬のぶくくゆる大猿一疋。ぶうの蜜ーうり出
ゆくあぶぞここまくーこそこハとあきこれたそ。大ろこうひきるふ。ちきろりのかうこる
ようこよーこをこれて。ごろこそこゆも。ぶひ。猿ゆうのかうこる
猿。ぶこゆもかゆうのぶろこさをこまろうとぶどゆそきこそ。大ろこうひをそ
さるこそゆもけんそくのざんぢうゆまで大ろこきこゆのまろこぶこゆるぶんとぶこ
ぶけれバ

うろくと猿よそまーゆんぢうの

あんよ相遠なる新の赤祇
かく打興じて。少人もありつくのちぐひしることを
かくうるぐさとて。打しるが。一膳の愛乃
うらよ。遠寺の種ひぐきことろう。鶏の夢家毎よ
うこひて。夜もあけしるよ。ぐておき出まべ。宿の
亭主まうて。ぐふ逗留。宮めぐりまへと
きむうよ。沙ぐふ鞠の拾女がいひしてべ。何と
らゆよかりしろ。もかく雑みてこの待よ

つきしるうこびよいのさまそれよまうこ
とて。食事そのへ案内者の云ことをあ
打つきて衣を立出るくよ。青物者るどぐてべて
女の賣あるくえてめぐ〳〵。又叶ところの
名物とて。深楊枝をうる家あり。
鹽敷をかりぐせの神の町
ちろの歯んせて
かくて弘山よのぐり。弘法大師の宝塔をうて。

名のみあり
除山の
滝の
ゝゝ
ちゝ
ゝ
氣の
あみを
りて
おち
櫻花亭
金九

ゝゝ
風千
りたれ
て
峯
ちる
も
ちる
花の
ちゝ
の
滝

壹凡斉
南野南

澄の宮のあたりよりいる「モミ」案内のおん人。
山寺へ何さまぐ称。東の「さんべ」ゴヤよ
ちゝんゝんの「そ」て乗ぐ二筋あるゴリヤア
どうちくいろていのぐく「ア」それもちゝん
さうん。それでこるんよおまいぐさのあとつそ。
西光おるゝんの「ア」るんのこゝさ。きさま案内よ
「住」まて来ゝこゝやア称ゝ「さ」よどやゝんの
「陸」それよ乗をちゝ称ゝゝんぐゝ。ゝりのぐ

六七
「サイナ」ゝゝや上ぐゝかゝゝゝうゝ山ゝるさんぐさ
ぐる。山さんの大日堂の称きまで。翌日あとよ
いさぐあゝゝぐ。それもゝさんてよゝおぐゝて
どやるいさゝん。ゝゝやいこまいといゝさゝ。あこの
宿屋の旦那どのゝぐ。ゝいゝんの乗ゝちゝぐも
あの元のいてどやゝうゝぐゝりけべゝん
さゝん。ひゝよいけて。ゝりよおとてどやゝゝ
ゝいる「ハ」ゝりヤアそんぐさゝぐ。アさ

あるて仕方がないれ弱へ。だんくうたんせる
アノ誰ふるとと問つてゑんせ。それじゃと
いつきよ来まるさるん少べらがうめ。人よ
弱るとよこるのこの景をうけハ来弱へ
そーこらとーとつてゑんまよーとのうち
女まごりの大ぜいづれ彼の男よべんとうさゑるど頭ずそのり
りさすてりづれもほきげんのちどりあーあて
おごまんんんてよちのおどれんんれがよろべ
ふといケニ。ひてたぶはけんばうておきあきやくる

とおりふとうちよ爺よ仰さよふる子がでけ。
来よんがみ。来よがれるボどやおごろや。
やさぬ。ゑんふもはけどよ。やうらくと。
そうこでかいろよきちゆうくきゆん。さるふ
きふれぬ。お稲荷さまの仰見旦どや。トントコ
トコナクワイくモシくお在いこう。何とい
とこへ出るぞいみ。さえの人何でや。山在西えぞく
どやゑんケニ。どんるげる西へるとばうこう

ゐうへぼるでおんを「そんじやうらん
うんるぷ。ぷーどもハ宮めぐりまるのじやが
あるのんよいてゐいうんみさまの人「そんじやまうう
はといれなのれト（けうちさまのひとゑのうちよ十八か
たうう）のうちすき娘がりる丑（きさ八
これはうんとうれてむしめのうれをおろうろうとうてめるとうア
さ丸のむしめもれハをおろうろうと旨てゐる丑ハ八ハ丸のそをさをひたて
うん稼へぷ。一娘がもいふよ。ろうれ。ろうしてざろき
うろうもれが新だろうへうんているハ。ナレト　ぷうぷうく。
トそろう。むしめのろうへうろうそうよまるとむしめハ「ちうしる
さをろうるそろうぷーまのよのよめとをひうへう　ちうしる

人さんじや。おらうん人さんぷ。むりのものよ
素をつけかのされやトめのくあうまとさぐろ「ゐんの
ろうさいわくまうん（娘）ぷ。ぷめくの新ぐやア
むしめのうんそきろうんものぷ。ト（ぷうら
たきのかのうさ
さーのれが
「新殿の朱を奪ハやむりさんの
かしそうよ深の「濃」のまう いと
氏さん丸文殊堂菜師堂のあるぷちう麻

とて名物のめうをうる茶屋あり
縁の名のちらまうせよ夜ハよそ
祝ごとノはなまうや夫婦祝うらん
それより両顔大日堂のあるりよいるぞうん
よう上の山又町だうの間。稲くの末社
多ー。是を巡拝とゞめうりといふとぞ
祝 一盃呑うくるうこゞやア祝へかさらうん
向ふの茶屋よい。娘がこんくるか。小ハどふるく

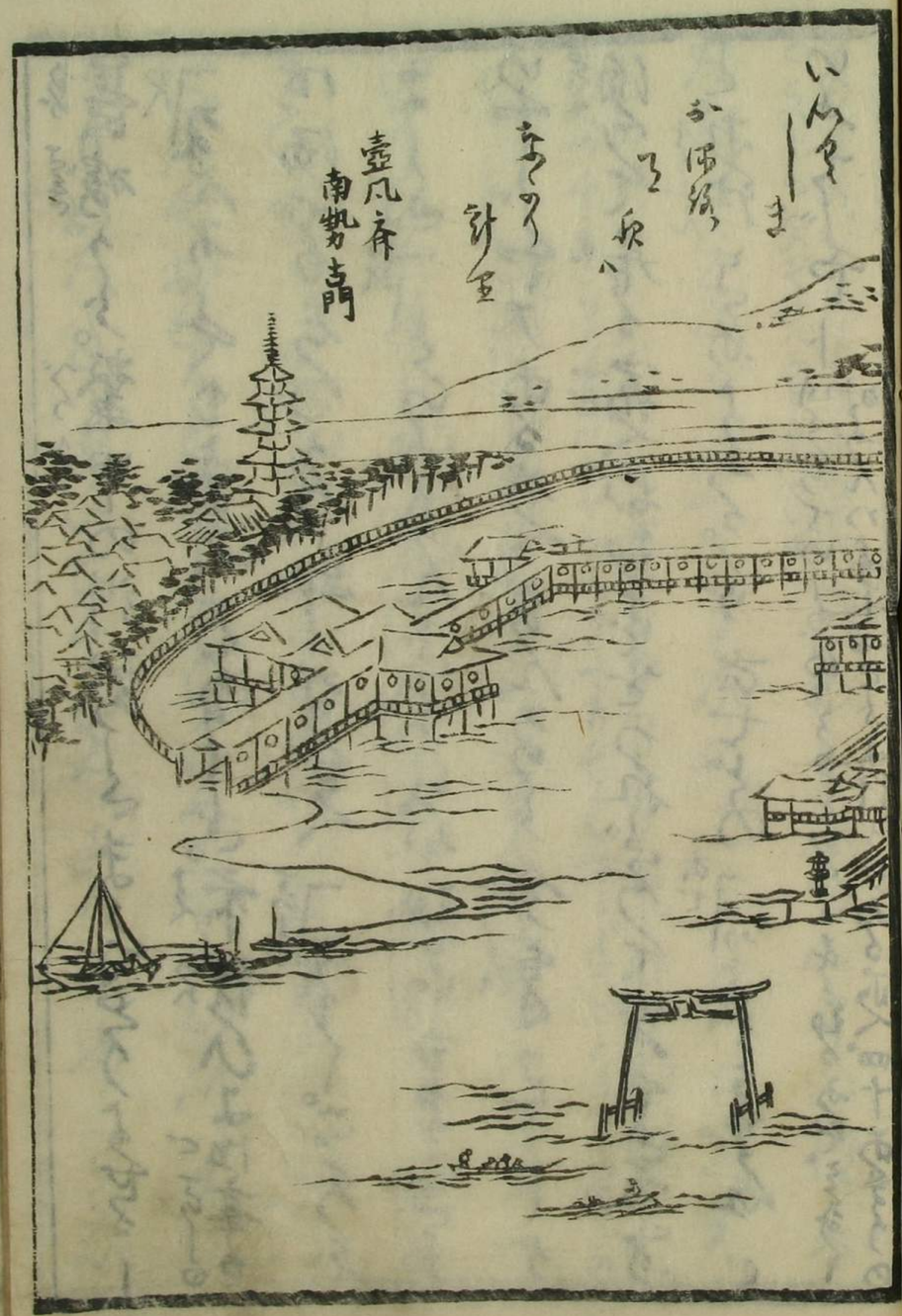
祝 イヤコレー。あとこの茶屋へいけんらんるみ
祝 るのゼノ サイノ峠 近在のさる
今持が妻ありいて。ぴーこまんでゞやさん。
あとこの娘やうてきまるよそと。親ちくいくさと。
ソリヤ云いようちや。夫度金ハ事でやろ
うんて。お待ハでけしこゞる。その思邪どんが。
娘ようよいとて。いんまゝ来やきやれんさうん。
あとの内でんぞゝゞんるくと。毎日ぴーの

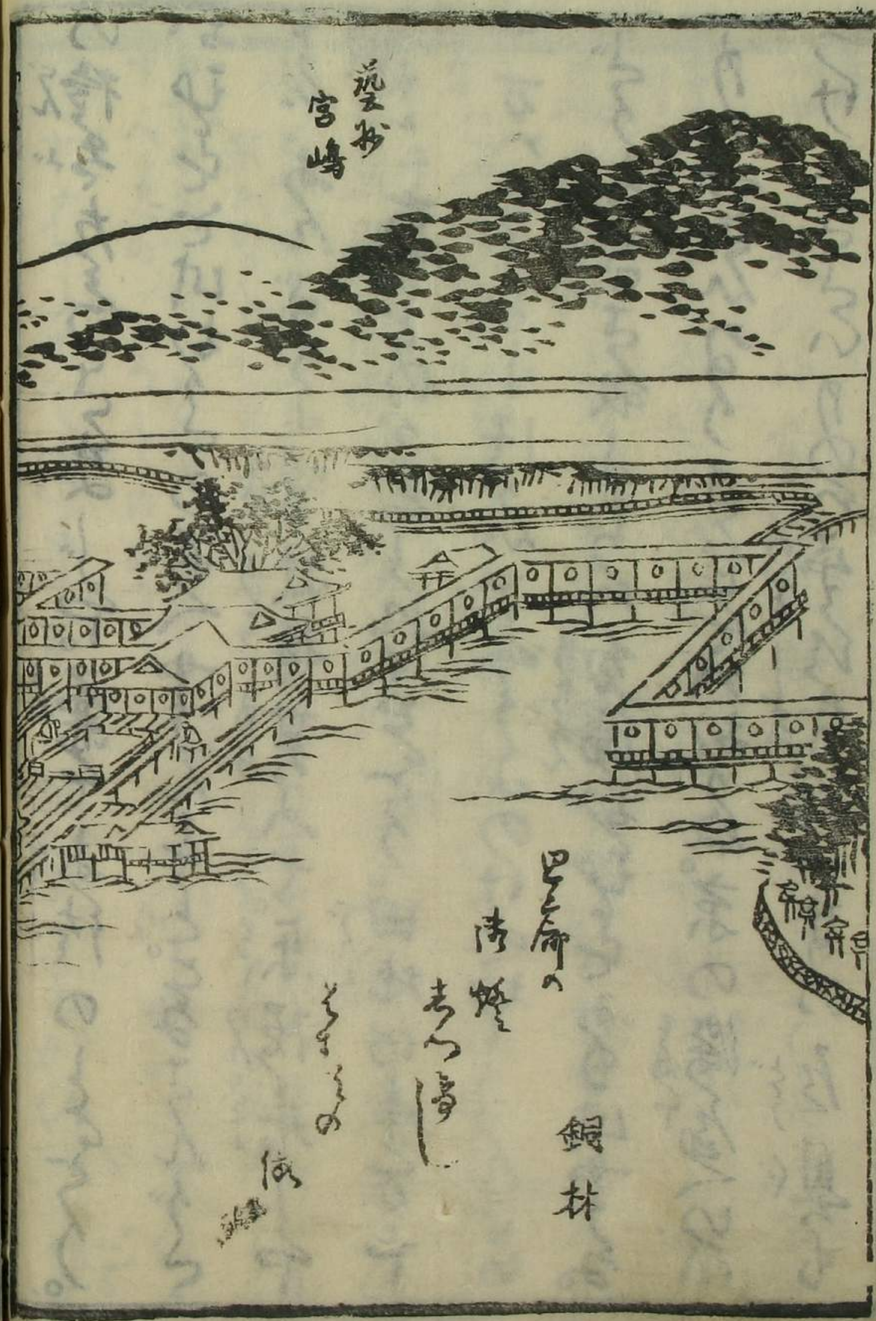
而くぞうよりせるさうん。ぞうの具形どんぼれ
まんていとあるそれ是非いとといて立さうん。
今いうたら。又そのとを催促しるどやあうと。
ようそれがやんぞうどやうるぞうハアそんるう
いうとがある。何んでかその具形どのまうどう。
そんぞとうんの而いもいうをその金持まうて。
ぼれていうたがぞうぞ。そんまるとうふ。酒を
出そんうう。只のまんといのかうだうりぶ

ホニコリヤそうん。大でけどやうるぞうさいうん
その具形どんとうのうハ。蟹がひしやこまやと。
色が悪んて。目が大きうて。鼻が横よひうさうて。
不男どやさうん。娘の幸ハ中ぶんれどさて
レコサのうんとある人しどやさうん。幸抱さんぜうく
娘いふてもいうさがそのちうりん
ぞどうの親どやさうん。コリヤようう。サアお出なされ
ト さうさうてかの ちやなへくうると ヤヨ六七どのテヤ。ようの具形なあ。

アイ地の御前の且那とものを。やうく久敷
ほれやふて来さうなるあれしろ。何でや。おあさまが
来るあれしろ。コリヤく御坪のへ。おうくたをばうて。
おこづりナセ。ザアく古七どもの。おづりあれ。アイ
モシ且那。おあづりあるさうな。コリヤ。ゆるさうもない
トうてあづりざるよとゆるとぶたづりをのは。
私をのくして茶ことぶんをとりちまるをうれべその時くうハ
田今をめをうてあり。けれど。さうあるハ。
十八へまくのしろうものなくるる。
アリヤ。さてどめて逢まよと。古七。此おくさぶかの地の四郎

の檀那方うさまじや。兼て御待のとをり。
ふひとを出おくさの所へ。やうんをとるさうんがる
きでゐんぢやう。皆持参して。乗陽者じや
ホンニ古七どのがおくれるとをり。田地の高方や
二万八千ばかり小ぜんアるゆうのけてもくおんぢい
ぢうさまさうさうへ勿論おもとある山やる。
りのぢんあるうさせていおくね。京の際屋くいひ
つけてさうひりのへ手ぢうさまの反異も


壺凡斎
南勢亭


宮嶋
銀林

長崎うら。数甲の引あらーさまでそうらせる
ーなんあくてもうめくたるすぶ。茶屋ひよ亭
ロ酒でもちうう出ーる女人ーエリくぺこうえ
まーくーとうくりんぶぐらぷ。ひとてめんぐう
いやーどやアあるめくぺのんるのう今者こてーが
酒つて居る宿へもをとをつれぶろていうぞ。ろう
と。お待ちあうぷパウ六七どの六七ーくうまんこ
いかてどやトけうちていもはさるるとぶーもるあぞ。ここ
ぶんかーしけある西人四十おまりの

いるのうりのもりてよううろく
とこのうちとのぞけば六七ぞんでいぞ
ーヤアくくちんまめ格さ
ちうさまがまんくとうん。のサアくーろちやく。
トこの格さちうとのハ六七ぐかるてあるゆどやの宝あて。
六の金りちうれば六七ありくまりて十ぶとりて居ぶの
上方ふ格さ
ーー六七どの。ぷらうらハとりさまのとうく
ぶろもんつてぷ。おう元はんるのて交巡りぶやと
きうつケニぷんういのとでや。かの「色」のもぶう
とぷんておとうとぷ。あうとうらいうきるもんりけ
ぶりもんつぶ。ろい西ぶとうとあうとうん

あて
「こりゃ」も。毎日毎日あるくのさるとまちおりまして。そうどあんおあいる。
モシおたみ〜やーさおひとん。芝でおざるゃるる
「ヤヨ」六七どのあのさんかホンニ。ちのおりさがわん
とうの格子たうさるどやるる「ヤ」ヤアく
そんじや。あうちやのおくかこりやうその
格子たうさるどや。こりゃ長くうよ長ぜるん
さうい。アノおくを。格子たうさるどやとりみて。

ふの男を合そのとまあるうさのじゃいの。
コレりんまのが来てじやさんが。りよおまんいいん
ほんみ。そうちやの稼をうて居てこざんせ。
家ざとの中ざーさで。おまん邪デよるるうとんの
「陸」りのんのうさいあくまして「度」サアーくりんまの
月邪。ひとうあぐりるのされ「格子」エイコリヤ。お茶屋道化
じやとん。トリうけそのむけ内六七ゆうてんあ。さうくつ
おさくつはりりのうちばばうさくハハおせう言うんと
してあるう「浪」コリヤとんざめふあかせる。六七どのりかい

ぐんみている弱くろ六七アるんアらいのピ
このおあをとぞうとそかしたいけんとんな。
おまいがと揚よぞくいそおこれおさん。
陪仆ヤ山ぶるぶうめもいろ沢てうさんぶう
ふまやアがる六七るんじゃいな。おまんがかうく
ふようみてぞ。ろくろまんーさこうちやるんらいな
陪ナニこいつふそくみろぶ トーちちやちふまーをしてーッ
そんんおろ月とまろめ少ハヤアくそぶあーさく陪コリヤ
ろちよりんあんをめ

六八大喜ぶぞそそんぐとをおてのけぞイ六七ヤアイ。
六七ヤアイ。トまろふうろうたーあもぐ六七ヤヨ
コリヤ死おるそんじゃ。トくろよあるどふをさろけ。あのぐろ
陪コレハはまろ弱ぐどあーさんであろふ六八こるさん
さちのはんるんんてまさんじゃケニぞちやう
いろそよおとぞうていんせ陪それぞろ川て。
こんるのふるうて弱るりのをどぞ。そるるんぐぎこる
も。おうてゐる人のとぐろぞアちつとのアる。ぞよ

おいてあるがいっぱいあるくいろいろ「イ」ニヤ
きちろのあれっぱうきろてある人でぶんちぶっぱん
るのみて求さ人のごんせんじゃるっ。麦よちんて。
り死おろっさっぱうらのうちが稼れるケニ。
そんるのげみとでけんろんト[ろんとでぶ宮侍ろ地八祖ふ帰を忌ふ]
子とうむりのあれがその日のうち化西へおろうつろ七十又日ちぶぶん
侍よりへちっそ又人の死さる時もぶぶよその日祝といふ西へつろんと
ろうむるその家へ勿論きろうよろろる人中でもそれくよ忌ちろう。
忌のけざるうちハ他へ出ぶって法しるるるふひろれがけてりも
ぶちをちぶろろて。「るんであろっどころなさるしちちが

これはけさのものじゃケニ。麦で死おろっぷこみ接
ちちもむろうい。病家のちいふて。おこぶろて
いろんせ「ハ」いろさるコリヤア何るるよ。ちちうで
病家がおころちとおいふろうがつれて侍るが
ろろるのぜ「侍」そんぶそろて。ぶんるふ生体がるん
りのちぶろて「ハ」ハテかるでもやろて麦ふせるが
い。ナニトかてんっもぶろちよ祭人あろふの「ナニ」。
麦ありとみやるんケニ病へいてやふてぶんせ。

それぢやアけまゝ移へ。ぼさん。どのようなる
イヤ京のどくみるのでや。さんざいさんせう。
そこまで。ぐで来もうさテこそ。その。ぐもかゝてやろ。
ふせていんセトいひつ。ありのうくさちりでイくと
どさろぎ。コリヤあうがてくぞんのゝもうりヤヤ
せう。ヤヨさゝ。兵のふ。ぼん。流。ぼでのうのてどや。
うひゝうさるさもうてめどるテこそんぐひさあん
そんのゝもめくうのもと。ぼよ今ひとり。梅組

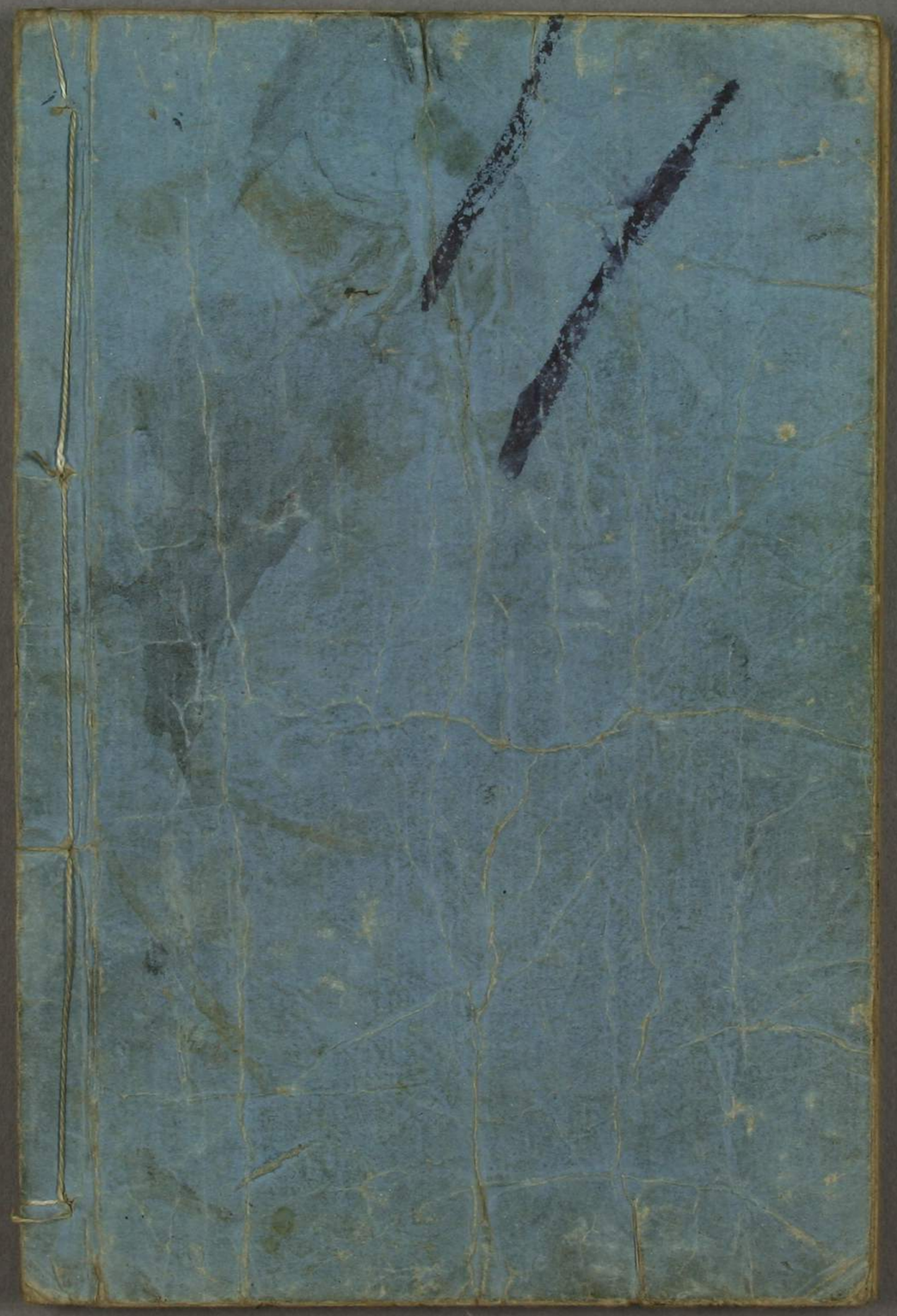
どのへ。イニヤ。片。梅のぐんせん。アノ男ひとりどや
ぼて。何のうのぐ。ぐるかさぐひとりでぼるのめく
ホンニ。梅組のゝよ。もめくどのゝて。ぐて来なさろさ
うう。ぐのて来もうさどやぐんせん。アノもとと
ふゝうでかゝて来もうさのどや。殘ぐぼるテこそんの
ぐるのうん。牛王さるの移さまで。ぼさる
のせて来もうさのどやてや。あい梅ぐのゝちや。
まゝ移へ。ぼ。ぼ。この六ぐ。癲癇。もうら

稲くと。こいつは汗梅かうぶせるものを。ちくさぶ
稲くぬハはめくとかつぐぐよ。汗梅いふ。ちく
はふぞ。をとかつぐとハ稲くがてあつてんとよ。
芋梅組どのしをまた。それできまることを
いふものぶ。をるの。ハ雑がの。ちいくがをつかう
ぬ。めつぷうふもうるいぬてんくんどのをのせる
どやぶんせんう。ホこそのぶくト。おセをかさいぶさ。
かぶようらのセ
ぶそちのところとうきいぶ。陳
りくのちくひうふそ。コリヤ肩がめりこむやうぶ。

ごうてきよりいい仏めぶ。ふいくかげんよ。をぶ
つをそふるりんぶよ。そふさ。癇病で死ぬ
りのい稲くとふうら。今よ。をぶつくぶろふ
トそのうちをのうちあてウをとうるこをちるよかあ
ちあとりのぶとさくやきあふむふのかさてうるあるちとこおセを
ふつけ。ヤヨコリヤ。おセあ。をるどもふ。打のりちり。て。
ふい元りちぶやな。ろうさ及のちぶれんが。東町
の今太とはんるのかて。観音堂のやうへいきちろさ
がろうさまちふぶとうい。ふとんあやうぶヤトうちふ

てゝ切るるおセ八月　るんどゆん。ロしーぐ　かくぐ　今年さめと
くどのうちあて
法華ゆていさとうん。ふくうんゆん　のこりヤかくしてハ
居ゝれんるん　トいひさまぐごをとびゆしそ。いろさんよりみのさん。
ほうぐきこハさもきろぶし。さそこそいろそこ
くうとせーてんうんゆきめ。のぐさどとめくうしともびちりめくさんよ進ゝけ
ふくうしぐつのよるうんてせんうさるのく。そうくゆどくぞうりにる。
これうう中ふさどの紀ゝハ。主へん。のころしくさとぐし。
ようぐ氏本ハこれぞうく

續猿栗毛二編下卷終

本屋

宮板